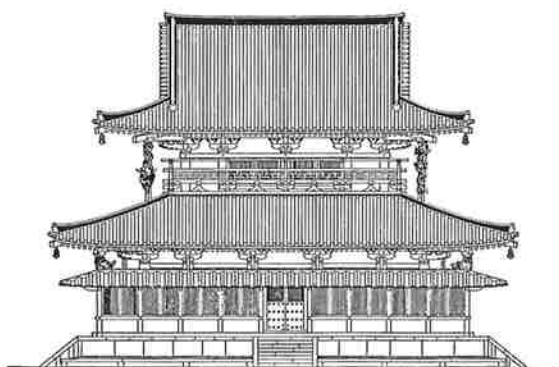


日本イコモス国内委員会

# JAPAN ICOMOS INFORMATION

第4期 第1号 1998年3月31日 発行



---

## 目 次

---

創設準備中の CULTURAL CORRIDORS 国際専門委員会 .....	石井 昭	1
PRINCIPLES FOR THE PRESERVATION OF HISTORIC TIMBER STRUCTURES		
最終草案について .....	伊藤延男・村上裕通	2
1998年第1回理事会(拡大理事会)報告 .....	石井 昭	7
ベトナム・ホイアンの町並み保存 .....	福川裕一	11
マノリス・コレース氏講演会「アクロポリスの歴史とその修復」 .....	松本修自	16
ACROPOLIS - HISTORY AND RESTORATION .....	MANOLIS KORRES	17
事務局日誌 (1998/1/1~3/31) .....		25
お知らせ .....		26

---

JAPANESE NATIONAL COMMITTEE

I C O M O S

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES/国際記念物遺跡会議

表紙 : 法隆寺金堂  
COVER : Horyuji Kondo

# 創設準備中の CULTURAL CORRIDORS 国際専門委員会 について

石井 昭

スペインのイコモス国内委員会委員長 MARIA ROSA SUAREZ-INCLAN DUCASSI 氏から、このほど、標記の件に関し、全イコモス国内委員会委員長に宛てた要請状（1998年2月12日付け）が送られてきました。「ICOMOS 傘下の国際専門分科委員会の一つとして、新たに INTERNATIONAL COMMITTEE ON CULTURAL CORRIDORS (ICCC) を設立するべく、過日、有志による準備会を発足させ、現在、それを拡大する形で新専門委への参加予定者を募っているので、ふさわしい人物を選んで推薦して欲しい」という内容です。

準備会発足の経緯や今後の予定については次のように述べられています。(1) 1997年次 ICOMOS 諮問委員会（11月20日～22日、モロッコ）の直後、スペイン・イコモスが主催して JOMADAS IBEROAMERICANAS と MEDITERRANEAN SEMINAR ON CULTURAL CORRIDORS という二つの会合を開き、それらの席上で準備会の発足を決めた。(2) 目下のところ、準備会にはイペロアメリカおよび地中海地域に属する計14ヵ国の有志が参加しており、事務局はスペイン・イコモス内に置かれている。(3) 新専門委への参加予定者が揃った段階で A FIRST MEETING OF THE WHOLE PREPARATORY GROUP を開く。(4) 本年末か 明年早々、スペインにおいて A FIRST CONFERENCE を開催したい。— こうした記述から推せば、おそらく (3) と (4) の間、つまり本年中に、新専門委 ICCC の設立について ICOMOS 執行委員会の正式承認を得る計画であろうかと思われます。

英語の CULTURAL CORRIDORS という言葉には、残念ながら、今のところ適切な日本語訳がありません。直訳すれば「文化通廊」「文化回廊地帯」となるでしょうが、多少とも馴染みのある言葉を選ぶとすれば「歴史の道」というのが近いように思われます。スペイン語では ITINERARIOS CULTURARES と呼んでいますので「文化の道」とすべきかもしれません。ご承知の通り、スペインには国土の北部を東西に延びる有名な「サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路」CAMINO DE SANTIAGO, ROUTE OF SANTIAGO DE COMPOSTELA が存在します。同国では官民あげてその保存に尽力しているだけでなく、国際条約のもとで、1985年には大聖堂を含むサンティアゴの旧市街を、また8年後の93年には巡礼路の全体を「世界文化遺産」として登録しています。CULTURAL CORRIDORS に関わる国際専門委員会の創設を期してスペイン・イコモスがイニシアティブをとるに至ったのは、こうした背景があるからでしょう。

30年余にわたる ICOMOS の歴史を振り返ると、議論される文化財の範疇、もう少し正確に言えば、保存の対象として意図的に提起される文化的遺産の範疇は、拡大の一途をたどってきたように思われます。ヴェニス憲章の段階では MONUMENT AND SITE が主体で、これに GROUP OF BUILDINGS が加わる程度でしたが、やがて HISTORIC QUARTER, HISTORIC TOWN AND VILLAGE, VERNACULAR ARCHITECTURE 等が加わり、世界遺産条約が実施に移されると、CULTURAL HERITAGE は NATURAL HERITAGE と並置され、続いて MIXED HERITAGE や CULTURAL LANDSCAPE が登場してきました。今日では、TANGIBLE な遺産と INTANGIBLE な遺産との不可分性が強調され、CULTURAL TRADITION や LIVING TRADITION の保存が議論され始めています。思うに、CULTURAL CORRIDOR なる概念も、当然ながら、このような流れの中に位置付けることによって理解されなければなりません。

日本にも CULTURAL CORRIDORS に関心をお持ちの多くの方々がおられる筈ですから、どなたか、少なくとも一人は、新専門委 ICCC に、準備会の段階から参加して欲しいと考えます。会員の皆様には、自薦・他薦を含め、適任者を早急に推挙して下さるようお願いいたします。また、会員外に適任者がおられる場合には、ご本人にこのことを伝えて ICOMOS への入会をお勧めくださるとともに、事務局または理事会のメンバーまでご一報いただければ幸いです。

” Principles for the Preservation of Historic Timber Structures” 最終草案について

伊藤延男  
村上裕道

イコモス国際特別委員会の一つである「木の委員会」においてかねてから検討しておりました表記文書の最終草案ができあがりました。1999年メキシコで開催される次期イコモス総会において採択されれば、イコモスのドクトリナル・テキストとなる筈ですが、それまでの手続きの一つとして、加盟各国の国内委員会のコメントを求めることとなっており、この度日本国内委員会に送付されてまいったのであります。コメント提出の期限は1998年4月15日となっております。

ここに、「木の委員会」に所属し長年この問題に関わって来ました私共から今日までの経過と内容の概略をご紹介します、日本国内委員会におけるご検討の参考に供したいと思えます。この Principles が検討され、作成された経緯は、今回国内委員会に配布された文書の最初に Document History として述べられています、ここに私共の記憶も加えて若干の解説を記すことにします。

まず、木造建築特有の保存については、1984年にフィールデン氏の論考があったのを最初とし、1988年にはミニム氏作成のガイドラインが発表と、その英国流の考え方に対するウィーバー氏の修正・改訂案発表もありました。そこで、1992年カトマンズで開催された木の委員会において初めて国際的な立場で討議が行われ、木の委員会として第1次草案が作成されました。次いで、2年後の1994年、姫路において開催された委員会で改めて討議された結果、第2次草案が1995年にできましたが、メンバーのコメントにより同年末に第3次草案となりました。この草案は、1996年、英国における木の委員会での検討、ヨキレート氏の修正提案、ソフィア総会時に開催された委員会での討議を経て、第4次草案となりました。この第4次草案は、もう一度委員会メンバーに配付され、最終的なコメントが求められ、それを取り入れた最終（第5次）草案となり、今各国内委員会に回付されたのです。

以上述べた経過からも分かりますように、この Principles の作成には、木の委員会としての討議に既に7年を要しており、その前史を含めると10年或いはそれ以上の歳月が流れています。その間、フィールデン氏を始め、ヨキレート氏など、日本来訪の経験を持ち、知日家ともいふべき方々が関与しており、カトマンズの時はかなり日本に批判的であった英国側も、姫路会議以後は極めて友好的となりました。しかしなんと云っても、日本建築とその保存に深い造詣を得ておられるラルセン氏が第1草案以来一貫して起草の中心の役割を果たされたことが重要です。これらの人々の関与により、この Principle の内容は、日本として予想以上に受け入れやすいものとなったと云うことができます。

私共は、カトマンズ以来総ての委員会に出席しておりますので、今日までの起草の過程を承知しております。第1次から最終まで総ての草案も手元に持っております。この種国際委員会の通例通り、委員会では草案文面の配布がなく、各自の記憶を元にしての口頭討議となる場合が多かったので、私共の理解力、語学力では逐次口を挟むのは難しいことでしたが、第4次草案については、配付資料に対し充分コメントを提出しました。ですから、委員各位のご賛同を得られる内容と信じてますが、充分ご検討願いたく存じます。（終）

# Principles for the Preservation of Historic Timber Structures

## 全文と解説・コメント (伊藤延男+村上裕道)

ICOMOS INTERNATIONAL WOOD COMMITTEE

### PRINCIPLES FOR THE PRESERVATION OF HISTORIC TIMBER STRUCTURES

The aim of these Principles is to define basic and universally applicable principles and practices for the protection and preservation of historic timber structures with due respect to their cultural significance. Historic timber structures refer here to all types of buildings or constructions wholly or partially in timber that have cultural significance or that are parts of an historic area.

For the purpose of the preservation of such structures, the Principles;

- *recognise* the importance of timber structures from all periods as part of the cultural heritage of the world;
- *consider* the great diversity of historic timber structures;
- *consider* the various species and qualities of wood used to build them;
- *recognise* the vulnerability of structures wholly or partially in timber due to differing rates of material decay and degradation in varying environmental and climatic conditions, caused by humidity fluctuations, light, fungal decay, insect attacks, wear and tear, fire and other disasters;
- *recognise* the increasing scarcity of historic timber structures due to vulnerability and the loss of skills and knowledge of traditional design and construction technology;
- *consider* the great variety of actions and treatments required for the preservation and conservation of these heritage resources;
- *note* the Venice Charter, the Burra Charter and related UNESCO and ICOMOS doctrine, and seek to apply these general principles to the protection and preservation of historic timber structures; and
- *make* the following recommendations:

#### INSPECTION, RECORDING AND DOCUMENTATION

1. The condition of the structure and its components should be carefully recorded before any intervention, as well as all materials used in treatments, in accordance with Article 16 of the Venice charter and the ICOMOS Principles for the Recording of Monuments, Groups of Buildings and Sites. All pertinent documentation, including

(表題)

冒頭の Principles は、第1次草案では Code of Ethics であったが、委員会討議の時、内容が実務に関わる部分が多いので、Code of Practice だとの意見も出、第2次草案では Standards と書き換えられた。それも第3次草案では Principles of Practice と改められ、第4次草案に引き継がれた。しかし私達は、of Practice は余分である、何故ならば次の前文に The aim of these Principles is to define...principles and practices...とあるから、と主張し、それが採用されて Principles だけとなった。

冒頭の文字は内容を規定するもので、重要である。私たちの内にも意見の相違がある。一人は cultural diversity を積極的に認めるには「倫理綱領」が良いとし、一人は内容が示す通り「実務規定」が好ましいとする。Principles は当たり障りのない選択である。

(前文)

前文のパラ1は、第1次草案にはなく、第2次草案でその第1センテンスのみ現れた。その中で注目すべきは preservation の次に (conservation) が付けられていたことである。これは両者が同じ内容を意味することを示している。多くの国際文書で preservation and conservation と並記するのと同じ趣旨に出たものであろう。なお、このような用法は第3次草稿以後では消えている。(但し本文では現在なお preservation and conservation と並記している箇所がある)。第2センテンスは第4次草稿から現れる。

小見出し「・」を付けた8項目の内1-7が内容的に重要である。第1草案において既に2-7に相当する項目があり、第2草案から7項目すべてが揃う。文言は逐次改訂補強されているが、そのうち注目すべきとを挙げると、

1) 第2項目にある diversity は第1-3次草案では variety であった。この変更は奈良会議で cultural diversity が重視承認されるという流れの結果であったという。

2) 第4次草案では、第4項目に火災による災害だけを挙げていたので、私達は神戸震災の経験に鑑み、地震その他の災害も加えるよう求めた。結果は fire and other disasters として総括することとなった。私たちは、地震災害を含むと理解すると返答しておいた。この裏には耐震補強は新設のイコモス構造委員会の討議に任せるべきだとの日本の考えがある。

#### 調査、記録及び資料化

この章は最初の頃はほとんど重視されておらず、第3次草案で僅かに Maintenance と

characteristic samples of redundant materials or members removed from the structure, and information about relevant traditional skills and technologies, should be collected, catalogued, securely stored and made accessible as appropriate. The documentation should also include the specific reasons given for choice of materials and methods in the preservation work.

2. A thorough and accurate diagnosis of the condition and the causes of decay and degradation of the timber structure should precede any intervention. The diagnosis should be based on documentary evidence, physical inspection, and, if necessary, measurements of physical conditions and non-destructive testing methods such as ultrasound, micro-drilling or infra-red thermography. This should not prevent necessary minor interventions and emergency measures.

#### MONITORING AND MAINTENANCE

3. A coherent strategy of regular monitoring and maintenance is crucial for the protection of historic timber structures and their cultural significance.

#### INTERVENTIONS

4. The primary aim of preservation and conservation is to maintain the historical authenticity and integrity of the cultural heritage. Each intervention should therefore be based on proper studies and assessments. Problems should be solved according to relevant conditions and needs with due respect for the aesthetic and historical values, and the physical integrity of the historic structure or site.

5. Any proposed intervention should;  
a) be reversible, if technically possible; or  
b) at least not prejudice or impede future preservation work whenever this may become necessary; and  
c) not hinder the possibility of later access to evidence incorporated in the structure.

6. The minimum intervention in the fabric of an historic timber structure is an ideal. Due to the character and particular requirements of timber structures, as well as subject to relevant traditions, their preservation and conservation may, however, require dismantling and subsequent reassembly in order to allow for the repair or replacement of individual members.

7. In the case of interventions, the historic structure should be considered as a whole; all material, including structural members, in-fill panels, weather-boarding, roofs, floors, doors

という章で簡単に扱われていたが、第4次草案に至って大いに拡大され、最終草案に至った。

第1条 ここでは構造及び部材状況を保存措置の前に充分記録するように、そして、ヴェニス憲章第16条と、「記念物、建造物群及び遺跡の記録のためのイコモス原則」に従って行うように書かれている。この項は日本の保存修理工事の手法を参考にして書かれたものであるが、前記「記念物...イコモス原則」がイコモスの他の特別委員会で検討され、最終的にソフィア総会で採択されたので、文面に加えられたのである。第2条 診断の仕方について述べている。第4次草案から現れた部分であるが、最終草案の時かなり詳しくなった。私達は、2つの改訂提案を行った。第一は、causes of decay の後に and degradation を加えること、第2には visual inspection を visual and tapping inspections と改めよということであった。第1は叶えられたが、第2は physical inspection という文言になった。

#### 観察と維持

維持という名の章は第2次草案から存在した。それが第4次草案になって Monitoring and Maintenance と改訂された。しかし内容は依然として短い1条だけで、文言のうち Continuous maintenance... が A coherent strategy of regular monitoring and maintenance... と替わったにすぎず、大袈裟な章の表題にはそぐわない感がある。

#### 保存措置

第1次草案では章を立てしないが、intervention の内容はある程度入っている。第2次草案では、本文全体を 1. General issues と 2. Particular issues related to historic timber buildings に分け、intervention は 1.2 - 1.4, 2.1 - 2.2 に分かれて入っている。それが第4次草案に至って大幅に改訂拡充され、第4-8条となった。最終草案では第7条の最後のセンテンス、即ち If it is necessary...as far as possible が加えられた以外、総て踏襲されている。

ここで先ず問題となるのは、intervention の訳語であろう。日本語の「干渉」でも「手入れ」でも具合が悪い。結局この章で使われている内容を考え、それに当たる言葉を探さねばなるまい。よく見ると、intervention の内容は preservation, conservation (この2語は前述のように同じことで「保存」が宛てられる) と restoration (後述するが「修理」又は「修復」が適当) である。この内容を適切に表す2字の語は見当たらず、ここでは4字の「保存措置」とした。

第4条では、保存の本来の目的は文化遺産の歴史的オーセンティシティ及びインテグリティを維持することであると述べ、第5条では、保存措置はいかなるものでも可逆

and windows, etc., should be given equal attention. In principle, as much as possible of the existing material should be retained. The protection should also include surface finishes such as plaster, paint, coating, wall-paper, etc. If it is necessary to renew or replace surface finishes, the original materials, techniques and textures should be duplicated as far as possible.

8. The aim of restoration is to conserve the historic structure and to reveal its cultural values by improving the legibility of its historical integrity or its original design within the limits of existing historic material evidence, as indicated in article 9 - 13 of the Venice Charter. Removed members and other components of the historic structure should be catalogued, and characteristic samples kept in permanent storage as part of the documentation.

#### REPAIR AND REPLACEMENT

9. In the repair of an historic structure, replacement timber can be used with due respect to relevant historical and aesthetical values, and where it is an appropriate response to the need to replace decayed or damaged members or their parts, or to the requirements of restoration.

New members or parts of members should be made of the same species of wood with the same grading as in the members being replaced. Where possible, this should also include similar natural characteristics, such as knots. The moisture content and other physical characteristics of the replacement timber should always be compatible with the existing structure.

Craftsmanship and construction technology, including the use of dressing tools or machinery, should correspond with those used originally. Nails and other secondary materials should duplicate the originals.

If a part of a member is replaced, traditional woodwork joints should, if appropriate and compatible with structural requirements, be used to splice the new and the existing part.

10. It should be accepted that new members or parts of members will be distinguishable from the existing ones. To copy the natural decay or deformation of the replaced members or parts is not desirable. Appropriate traditional or well-tested modern methods may be used to match the colouring of the old and the new with due regard that this will not harm or degrade the surface of the wooden member.

11. New members or parts of members should be discretely marked, by carving, by

的で、将来の保存工事を妨げたり、証拠が失われないようにすべきであるとし、第6条では、保存措置は最小限が理想的だが、条件によっては解体・組立も必要となるとする。ここは日本にとって最も重要な条文中で、私共は受け入れ可能と思う。しかし、保存措置には解体修理だけでなく、修繕や維持修理、予防的な保存措置等も含まれており、全体のバランスを考えた修理のあり方を検討をする必要があるように思う。第7条は、建造物を全体として保存すること、部分も大切にすることを述べており、最終草案で表面仕上げのことが追加された。第8条では、restorationの目的が、保存し、かつ証拠があれば歴史的完全性や最初のデザインの明示を推進して、その文化的価値を現すことであるとする。これは国際文書としてのrestorationを定義した最初として重要であるが、内容は日本が明治以来用いてきた「修理」と全く同一であり、戦後使うようになった「修復」とも合致しよう。日本の文化財修理が歴史的価値と美的価値のバランスを求め続けている姿が認められたものとして喜ばしく、今後も明治以来の修理システムの長所は維持してゆくことを心がける必要がある。

#### 修繕と取替

ここでも訳語が問題となる。replacementは「取替」で問題ないが、repairを通常通り「修理」と訳すと、restorationとの兼ね合いで困ってくる。第9条から第11条までの内容を見ると、総て部材の取替、又は部材の一部の取替（繕い）に関することである。かく考えると、repairの訳語は、傷んだ所だけを直す消極的修理の「修繕」が最適であろう。或いは補足材の焼印に使う言葉の「修補」でも良からう。

第9条は4つのパラからなる。パラ1は取替の正当性を認め、歴史的、美的価値に正當な敬意を表して取替材を使用できるとする。これは日本の修理の思想と一致する。パラ2は取替材が同種、同品等、できれば同性格であるべきであるとする。パラ3は新旧技術の一致を説く。パラ4は伝統的継手を繕いに使用すべきことである。第10条は、新材は判別できるようにすべきだとし、破損変形の疑似模造は避け、良い古色を用いることとする。第11条は新材に焼印等を付すべきことを求めている。

#### ”歴史的保存林”

この章は第1次草案から一貫して見られる所であって、内容は歴史的木造建造物の保存に必要な木材を得るための保存林の創設と、保存工事用の木材の貯蔵を奨めるものである。修補材が無くなっては大変だから、総論としては誰も賛成であろうが、この種の保存林(実は活用林!)の思想がなく、文化財保存用木材の長期的需給の見通しも

marks burnt into the wood or by other methods, so that they can be identified later.

### "HISTORIC FOREST RESERVES"

12. The establishment and protection of forest or woodland reserves where appropriate timber can be obtained for the preservation and repair of historic timber structures should be encouraged.

Institutions responsible for the preservation and conservation of historic structures and sites should establish or encourage the establishment of stores of timber appropriate for such work.

### CONTEMPORARY MATERIALS AND TECHNOLOGIES

13. Contemporary materials, such as epoxy resins, and techniques, such as structural steel reinforcement, should be chosen and used with the greatest caution, and only in cases where the durability and structural behaviour of the materials and construction techniques have been satisfactorily proven over a sufficiently long period of time. Utilities, such as heating, and fire detection and prevention systems, should be installed with due recognition of the historic and aesthetic significance of the structure or site.

14. The use of chemical preservatives should be carefully controlled and monitored, and should be used only where there is an assured benefit, where public and environmental safety will not be affected and where the likelihood of success over the long term is significant.

### EDUCATION AND TRAINING

15. Regeneration of values related to the cultural significance of historic timber structures through educational programmes is an essential requisite of a sustainable preservation and development policy. The establishment and further development of training programmes on the protection, preservation and conservation of historic timber structures are encouraged. Such training should be based on a comprehensive strategy integrated within the needs of sustainable production and consumption, and include programmes at the local, national, regional and international levels. The programmes should address all relevant professions and trades involved in such work, and, in particular, architects, conservators, engineers, craftspersons and site managers.

まだ立っていない日本に受け入れられるかどうか、私達は慎重に見守ってきた。遂に第4次草案に対し、ギリギリの選択として次の修正を提案した。それは、パラ1が、All countries are encouraged to ... で始まっていたのを The establishment and protection of forest or woodland reserves ... should be encouraged. と受動態にする提案であった。理由は、1) 他の条文との調和上良いこと 2) イコモスドクトリンは第1にはイコモス会員、第2には史跡・建造物の保存に責任を持ち、関心のある人々のための綱領であって、国を縛る権限や力はない、それができるのはユネスコの条約、勧告である、ということであった。この修正案は幸いに認められ、最終草案の如くになった。パラ2についても、institutions が具体的にどんな機関を指すのか等不明な点があり、何らかの対案を提出しようかとも考えたが、名案が浮かばず、そのままとなった。

### 現代の材料と技術

第13、14の2条からなる。第13条では、エポキシ樹脂などの現代材料、暖房や防火システムのような設備は、慎重な検討を経てから使用又は設置すべきことを述べている。第14条では化学的保存剤も慎重に使うべきであるとする。

### 教育及び養成

第15条。教育計画を通じての文化的価値の復興が保存発展政策に必須な要件であること、養成計画が奨められるべきこと、養成は生産と消費の要求の中で形成される総合的方策に基礎を置いて、地方、地域、国、国際の各レベルを包含すべきこと、計画は建築家、保存専門家、技術者、技能者、マネジャー等あらゆる職業に向けられるべきこと、等を述べている。

この Principles の草案を読んでいくうちに、私達は2つの異なった観点から判断しなければならぬことを痛感した。一つは、イコモスという国際会議の一員として、世界共通のルール作りに大きな意義を認める立場で、他は、この国際ルールと日本が受け入れ可能な限度との接点を見出そうとする日本の”国益を守る”立場であった。よく、外交には100%の勝利はない、51%良ければ成功とすべきだ、と言われるが、この Principles の場合は、幸いに日本を良く理解した人々が起草検討の中心になったこともあり、日本としては恐らく51%をかなり上回る成果を得たのではないかと思う。しかしなお、日本として更に将来の改良、精進をせねばならない面が残っている。日本イコモス国内委員会が最終的な意見の集約を行うに当たって、大局的な観点からのご検討を願いたい。



# 1998年第1回理事会（拡大理事会）報告

先の1997年次総会において選任された新役員による最初の会合として、1998年第1回理事会（拡大理事会）が、去る1月24日（土曜日）午前10時30分から午後1時30分まで、東京・神田の学士会館で開催された。出席者は、委員長：石井 昭、顧問：伊藤延男・稲垣榮三、監事：石沢良昭・木原啓吉、理事：稲葉信子・岡田保良・田原幸夫・日高健一郎・藤木良明・藤本 強・前野まさる・宮本長二郎・宗田好史・安原啓示・山田幸正・渡辺保弘、小委員会主査：益田兼房、事務局員：我妻綾子（陪席）の各氏であった。

議事に先立ち、出席者の自己紹介と、日本イコモス国内委員会規約の確認を行なった。また、委員長から「拡大理事会」の運営について「先の総会決定にもとづき今期は理事会の構成を拡大し、理事・監事・顧問だけでなく、小委員会主査・ICOMOS本部執行委員にも参加願うこととした。表決が必要な場合にはもちろん規約に従うが、通常は、なるべく全員の合意をもって運営したい」との方針が述べられ、これを了承した。

## 審議事項

### 1) 理事の会務分担について

規約第22条の主旨に沿い、理事（全15名）の会務分担について審議し、以下の通り決定した。

- 副委員長 : 藤本 強・前野まさる
- 会計担当 : 宮本長二郎
- 庶務担当 : 渡辺保弘（事務局担当）・上野邦一
- 会員担当 : 岡田保良・近藤公夫・田中 琢
- 事業担当 : 田原幸夫・日高健一郎・安原啓示
- 広報担当 : 藤木良明・宗田好史・山田幸正
- 渉外担当 : 稲葉信子

### 2) 1998年事業計画について

【研究会・講演会・他】（1）宮本理事から「東京国立文化財研究所が短期招聘するギリシア文化省・アクロポリス文化財保護委員会・監督官：Manolis KORRES氏を講師とし、同研究所と日本イコモスとの共催により、来たる3月14日（土曜日）、パルテノン神殿の修復を主題とする講演会を開いてはどうか」との提案があり、これを実施するべく、案内状の発送を含む諸般の準備を事務局に依頼した。（2）今後の研究会・講演会・等の事業計画については、田原理事・日高理事・安原理事に検討を委ね、次回拡大理事会に具体案を提出願うこととした。

【文化遺産の保存に関する憲章等の調査研究】益田主査のもとに第1小委員会を組織し1999年1月までの予定で当事業を実施するとの既定方針に沿って、同主査から実施計画案が示された。審議の結果、これを大筋において承認するとともに、(a)可能な部分から直ちに実行に移すこと、(b)作業分担・日程・予算配分・等を含む計画書を次回拡大理事会に提示すること、(c)最初の研究会をなるべくならば次回拡大理事会当日に開くよう準備すること、などを同主査に付託した。

【出版協力・他】羽生主査のもとに第2小委員会を組織し、日本イコモスの対外貢献の

一環として、また会費外収入の方途として、出版協力・文化財観光企画などの事業を行なうことが、1997年次総会で合意されている。今回は同主査欠席のため審議に至らなかったが、近畿日本ツーリスト出版部刊く世界遺産を旅するのの記事監修（有志参加、継続中）を含め、当面の方針を次回拡大理事会に提示願うこととした。

### 3) INFORMATION誌の発行計画について

【第3期第12号】先期理事会の責任で作成する最終号（1月末発行予定）について、委員長から、日本イコモス1997年次総会報告、ICOMOS ADVISORY COMMITTEE 報告、等を主内容とする目次案が示され、これを了承した。

【第4期第1号以降】(a)年間4回以上（原則として理事会開催の都度）発行する。(b)従来は会員だけに配布したが、今後は若干増刷し、国内関連機関の一部や海外ICOMOS国内委の一部にも配布する。(c)内容・体裁ともに可能なかぎり改善する。- 如上の方針が委員長から提示され、参考例としてUS/ICOMOS NEWS その他が回覧された。審議の結果、この方針を承認し、とくに体裁の変更と第1号の編集については、時間的余裕が乏しいので、広報担当（在京）の藤木理事・山田理事に事務局担当の渡辺理事と委員長を加えた4人のグループに一任することとした。

### 4) 国際専門分科委員会への参加者の選任について

【ARCHITECTURAL PHOTOGRAMMETRY 専門委】(a)この専門委は現在改組計画中で、名称もRECORDING, DOCUMENTATION AND INFORMATION MANAGEMENT へと変更したい意向を持っており、(b)執行委員10名中の1名を日本イコモスから推薦するよう、Robin LETELLIER 氏（事務局長、カナダ）から再三にわたり要請されている旨、委員長から報告があった。審議の結果、会員担当の岡田理事に人選を委ねることとし、次回まで決定を延期した。

### 5) インターン・プログラムについて

【US/ICOMOS INTERNATIONAL SUMMER INTERN PROGRAM】日本イコモスあてに届いた1998年次の募集要項が回覧され、委員長から「同様の募集要項が昨年以前も事務局に届いていたらしいが、委員長に通報されず、理事会に諮られなかった」旨が述べられ、次いで前野副委員長から「従来通り東京芸術大学の院生を推薦したい」との提案があった。審議の結果、(a)今回は応募期限（2月末）が迫っている所以この提案を採択し、(b)来年以降は広く会員に通知のうえ公募・選考することを申し合わせた。

【日本イコモスとしての対応】「US/ICOMOS が大学院生・若手専門家を対象に実施している上述のインターン・プログラムは、元来、双務的なものであって、昨年の諮問委員会議（11月、モロッコ）の際にも米国の Ann Webster SMITH委員長から『日本側の受入態勢を早く整えて欲しい』と要請されたので『日本語会話能力を応募者の資格要件としてよければ実現可能であろう』と返答した」旨、委員長から報告があった。次いで、前野副委員長から「すでに関係諸方面に働き掛けているので実現に向けて会員各位の支援を得たい」との提言があり、次回以降、継続審議することとした。

### 6) 日本イコモスからの情報発信について（継続）

【ICOMOS NEWS への寄稿】パリの本部事務局から年3回発行されているICOMOS NEWS に日本の国内情報を載せるべく、先期理事会で方針と担当を決めたが、まだ実行されていない。さしあたり、1997年次総会の模様、役員改選の結果、国際セミナー等の報告・予告、レポート類へのアクセス案内、などを短信の形にまとめて寄稿したい。今期は、稲葉理事に情報収集と原稿作成を担当願うこととする。

【インターネット】日本イコモスのホーム・ページを開設する件については、かねて宗田理事が提唱し、先の総会でも安原理事から提案があり了承された。時間不足のため今回は審議に至らなかったが、実現に向け、次回以降、継続審議する。

## 7) 日本イコモス紹介リーフレットの作成について (継続)

ICOMOS および日本イコモス国内委員会を紹介するための簡便なリーフレットを作成するよう、先期理事会で方針を立て、その準備を広報担当の宗田理事に委ねている。「10年ほど前に稲垣副委員長(当時)の担当で作成された先例とパリの本部で最近作成された国際版とを参考にして原案をまとめ、次回拡大理事会に提出して欲しい」との希望が委員長から示され、同理事に引き続き担当願うことになった。

## 8) ユネスコ世界遺産センター「専門家調査票」について (継続)

Selection of Experts for activities relating to the implementation of the World Heritage Convention (世界遺産条約の実施に関連する諸活動のための専門家の選定)と題する調査依頼が、昨年8月、外務省・文化庁を経て日本イコモスに届き、とりえず文化庁の措置に倣って「機関としての JAPAN-ICOMOS」だけを登録した。文化庁の担当者の言によれば「個人」についての調査票を追って集める由であったが、その後、連絡がない。こうした背景説明のあと、委員長から「ICOMOSは今年の諮問委員会議(11月、モロッコ)において、みずから「専門家人名録」を作成する方針を決めているので、推移を見守り適切な措置を考えたい」旨が述べられ、これを了承した。

## 9) 組織上の課題について (継続)

【当面の方針】先期理事会で決定し INFORMATION 3-11号に掲載し 97年次総会で承認された「会員数・会員構成」および「98年次以降の事務局」に関する方針を、今期理事会の立場で再確認した。

【中長期方針の検討】委員長から、先の総会で提起した以下の諸項目について今後の拡大理事会で継続審議願いたいとの要請があり、これを了承した。(a)会員：- 会員数の増加は望ましいか。- 入会希望・推薦・入会承認のルールをどうするか。- 団体会員・維持会員(賛助会員)は可能か。(b)財政：- 会費は値上げできるか。- 会費外収入を確保する望ましい方法は何か。- 活動経費個人負担の原則は貫けるか。(c)事務局：- 何処に置くか。- 誰が責任を負うか。- 経費をどうするか。

## 10) 拡大理事会の次回開催日時について

次回は4月18日(土曜日)午後1時半～4時半に開催する。以後の予定として、第3回は7月中、第4回は10月中に開催することを申し合わせた。

## 報告事項

### 1) 国際専門分科委員会関係

【WOOD 専門委】伊藤顧問(同専門委副委員長)から次のような報告があった。(a)本年10月に日本で開催する予定であった「HISTORIC FOREST RESERVES に関する国際専門家会議」は、期待した AMERICAN EXPRESS 社からの資金援助が不調に終わったため、縮小あるいは中止せざるを得なくなった。(b)同専門委の1998年次 ANNUAL MEETING は日本でなく中

国において開催すべく関係者が現在準備中である。

[UNDERWATER CULTURAL HERITAGE 専門委] この専門委は Voting Member の改選期を迎え、現在、その手続きが次のように推移しつつある旨、委員長から報告された。(a)先方の現委員長 Graeme HENDERSON 氏 (オーストラリア) から昨年12月13日を期限として候補者を推薦するよう要請されたので、予定通り荒木伸介氏を推薦した。(b)年末に22か国24名の候補者を列記したリストが届き、その中から18名 (内規にもとづく定員) を選ぶための投票として、各候補者に1番から24番までの適格順位を付け、1月末日までに返送するよう求められた。しかしこの選挙方法には疑義を感じたので、理由と代替方法を挙げ、1国1名・計22名を選任するよう逆提案を試みた。(c)1月12日付で返信が届き「提案は次回に向けて検討するが今回は既定方針を変更できないので協力して欲しい」由であり、余儀なくこれに従おうと考えている。

[ANALYSIS AND RESTORATION OF STRUCTURES 専門委] 日高理事 (同専門委Voting Member) から 次のような報告があった。(a)同専門委では第12回ICOMOS総会における採択をめざして「歴史的建築物の構造補強と修復に関する指針」を現在起草中である。(b)昨年9月の地震で損傷したアッシジ (イタリア) の歴史的建築物の修復方法をめぐって2月末に現地で開催されるので出席する予定である。

## 2) ブルガリア・イコモスとの交流

委員長より次のような報告があった。(a)第11回ICOMOS総会 (1996年、ソフィア) の折に両国イコモス間の友好親善を約し、その一環として Angel TOKMAKCHIEV 氏 (ブルガリア国立文化財研究所員) を国際交流基金の支援によって招聘した。同氏は昨年9月から東京芸術大学客員として滞日中であり、本年3月中頃に帰国する。(b)このほど Todor KRESTEV 委員長から両国イコモス間の交流をさらに発展させたい旨の親書 (97年12月25日付) が届いた。添付されたプロトコールはあまりにも膨大な内容を含んでいるので、当方としてはステップ・バイ・ステップで進みたい旨を回答するつもりである。

## 3) 世界遺産登録候補に関する評価作業

[HISTORIC MONUMENTS OF ANCIENT NARA] 日本政府は UNESCO に対し「古都奈良の文化財」を世界遺産目録に登録するよう申請しており、まもなく ICOMOS による審査が開始される。この件に関し委員長より次のような報告があった。(a)昨年末、ICOMOS事務局長 Jean Louis LUXEN 氏から要請状が届いた。日本を訪れる Evaluation Mission と事務局の世界遺産担当者である Henry CLEERE 氏の双方に協力して欲しいという内容であった。(b)ただちに CLEERE 氏に書簡を送ったところ、一昨日、同氏から返信が届いた。Mission には中国イコモスの GUO Zhan (郭 旃) 氏が予定されている由である。(c) ICOMOS 内部でとり交わす意見は厳に confidential とされているので、慎重に対応したい。

## 4) 第12回ICOMOS総会 (1999年、メキシコ) 予告

日程 : 10月16日-23日 (各種役員会 : 10月13日-16日)

会場 : 4都市 MEXICO, MORELIA, GUANAJUATO, GUADALAJARA

シンポジウム等の会場が4都市に分かれることについて「昨年11月の諮問委員会議で批判的意見が続出した」「プログラムの編成をめぐって今後なお曲折が予想される」と委員長から補足説明があった。

(理事会報告 文責・石井 昭)

## 会員だより ベトナム・ホイアンの町並み保存

福川裕一（千葉大学）

### これまでの経過

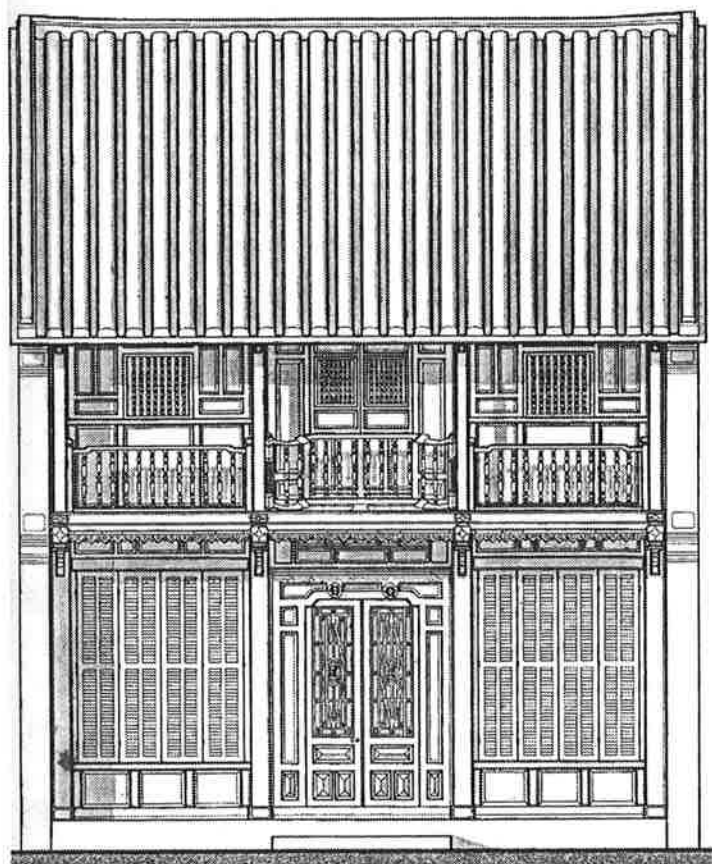
私たちがベトナムの歴史都市ホイアンをはじめて訪れたのは、1992年9月であった。そして大学チームによる本格的な調査が1993年3月から、また文化庁を中心とした建物の修復が同年9月から開始された。以後、建物調査は毎年2回ずつ実施し、1995年3月にはメインストリートであるチャンフー通り沿いの建物についての調査をほぼ終えた。それ以外の通りについてはハノイ建築大学が受け継ぎ、昨年7月に一部を残して調査を終えた。並行して考古学の調査も行われているが、これは今後も長く続くであろう。ホイアンは、2世紀から15世紀まではチャンパ王国の商業中心であり、そのさらに以前にはサーフィン文化が栄えていた。考古学的にも興味の尽きない場所なのである。

修復は、チャンフー通り80番の建物（下図）を皮切りに、121番、142番の修理を終え、現在同通りの48番およびグエンチミンカイ通り6番の修理が進行中である。この間、とにかく雨が漏らないようにと、約40軒の屋根替え工事も行った。1995年6月には、町並み保存に関する外国の支援を受ける組織として、グエン・ティ・ビン副大統領を名誉会長とするホイアン・ソサエティが設立された。

最初に修復したチャンフー80番は、ホイアン周辺の発掘の成果を示す「貿易陶磁博物館」となった。ここにはベトナムはもちろん、中国、日本などの陶磁器が展示されている。中にはイスラムの陶片もあり、

ホイアンがまさに「海のシルクロード」の結節点に位置した都市であったことを実感することができる。

ホイアンが、国際貿易港であったのは今世紀初頭までである。その後は、深い水深の得られるダナンが発展の中心となった。現在では400万人を擁するダナンに対し、ホイアンは6万人と大きな差がついている。代わりにホイアンには美しい町並みが遺された。ホイアンはまた、16世紀の末から17世紀にかけて日本人町があったことでも知られる。しかし遺されている痕跡はさほど多くない。町並みのはずれにかかる日本橋（橋そのものは中国風だ）、4つの日本人の墓、そして近くの五行山にある日本人の名前が



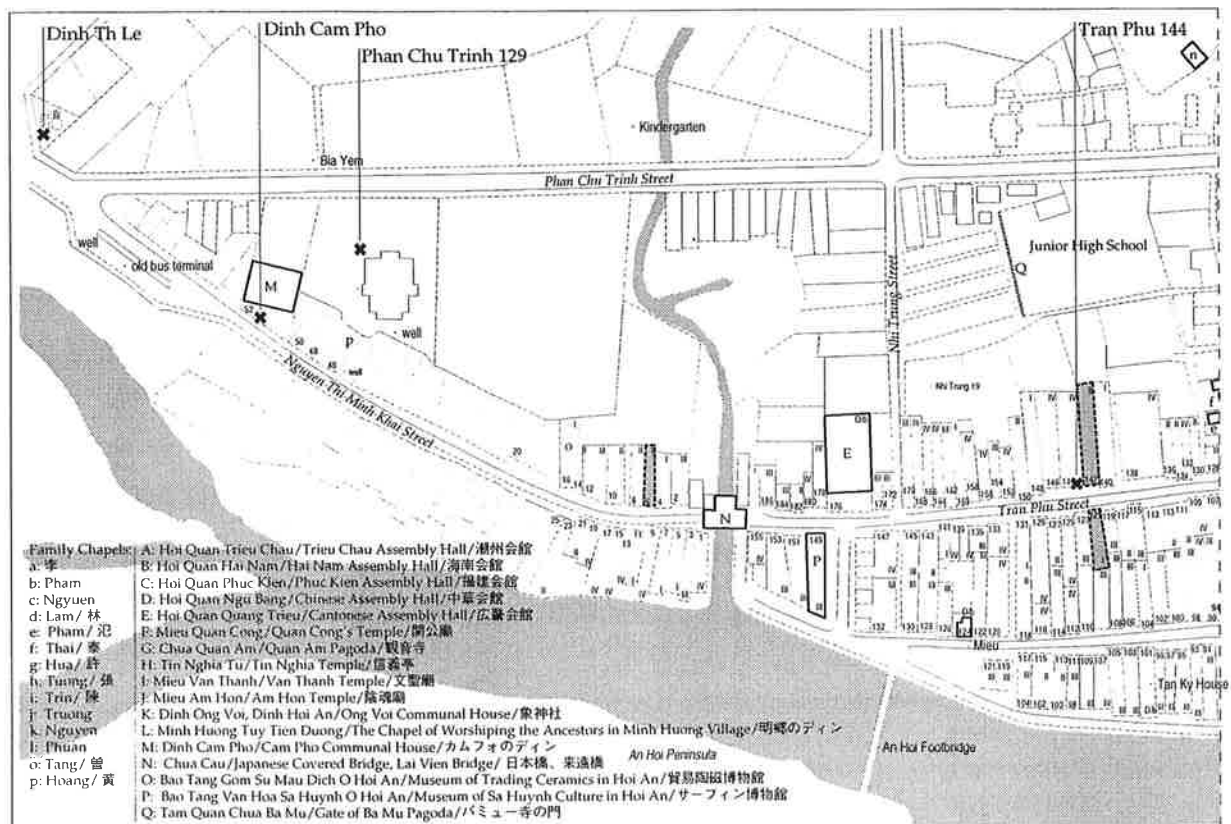
チャンフー80番  
現・貿易陶磁博物館  
1920年代ごろの建物と推定されている

刻まれた石碑、といったものが主なところだ。現在われわれが見る町並みは、その後優勢となった中国人が築いたものである。ホイアンは、東南アジアの代表的な華人街のひとつでもある。

私たちがホイアンとかかわりを持つようになったきっかけは、1990年3月ダナンで開催された国際シンポジウムである。ベトナム政府は、1985年にホイアンを国家史跡に指定していたのだが、このシンポジウムでは、「ベトナム政府、クアンナム・ダナン省、およびホイアンの住民は文化財の保存のために最善を尽くしてきたが、もはや修復や復元はもとより、その維持すら能わぬ状態となっているのが現状である」というアピールが採択された（同シンポジウムの記録は、『海のシルクロードとベトナム』（穂高書店）として公刊されている）。1985年といえば、まだまだベトナム戦争の後遺症が色濃く残っていた時代である。史跡に指定したといっても、廟など公共性の高い建築の修理で精一杯であり、民家にはほとんど手がつけられていなかったのである。私たちの調査は、このアピールに対し日本の文化庁が技術上の協力を申し出、またベトナム側の要請があって実現したものだ。以来、日本側では昭和女子大学の友田博通教授を中心に、文化庁、各大学、日本建築セミナーなどがチームを組み、調査や修復に取り組んできた。

### 調査からわかったこと

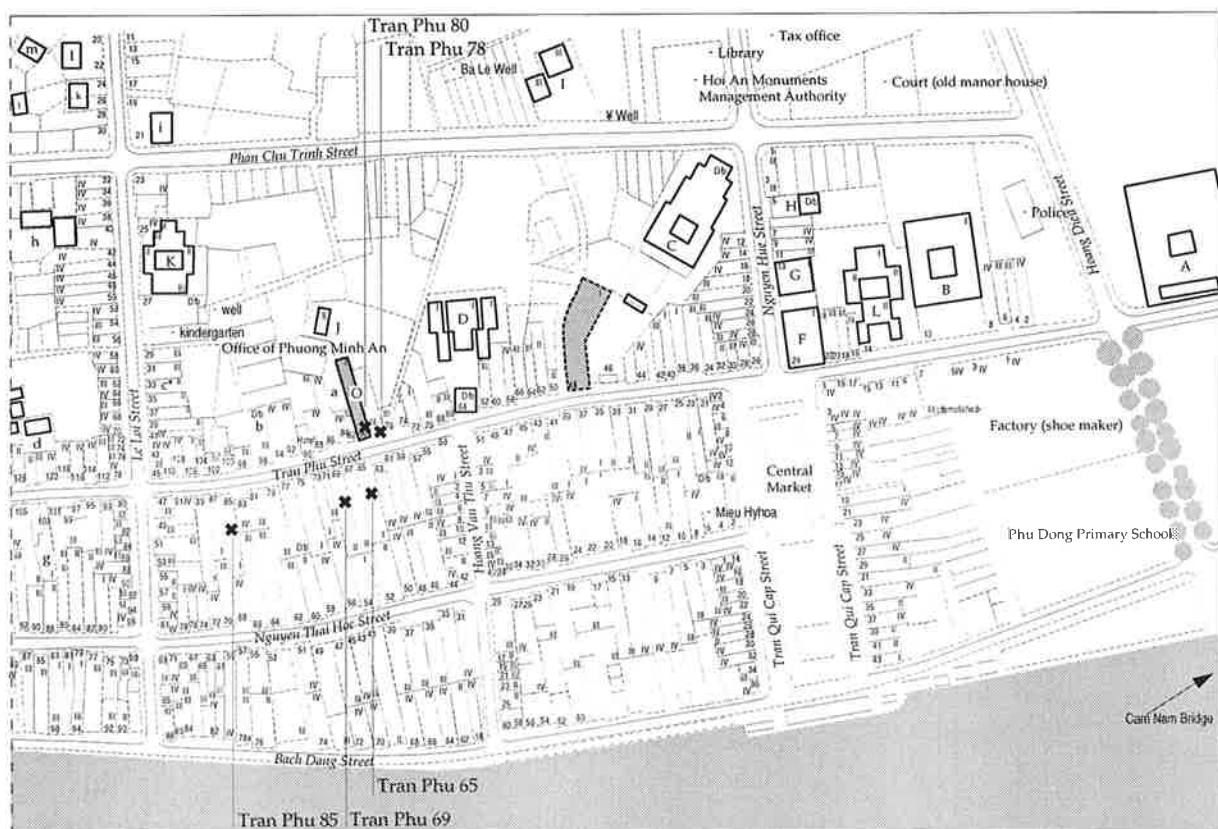
調査は、考古学と建築について行われてきた。考古学調査は菊池誠一氏が精力的に取り組んでおられるが、「日本人町はどこにあったか」という問題については、簡単に報告しておくべきだろう。ひとことではいえない、調査前に日本人町があったと想定されていたチャンフー通り周辺には、日本人町のあった17世紀代にはまだ町はなかったらしい。チャンフー通りの中程にある、もっとも古い建物のひとつと推定されるチャンフー85番の裏庭を発掘したところ、3層にわたる建物の床が発見され、そのうち最下層



の建物の床は同時に出土した陶器から18世紀と判断されたのである。ほかの地点を発掘しても、より古い時代の痕跡を見出すことはできなかった(下図の×が発掘地点である)。代わりに、日本橋より西側のデイン・カムフォー(カムフォー村の集会所)からかなりの量の17世紀後半の肥前磁器が、中国やベトナムの陶磁器にまじって発見された。16世紀から17世紀にかけてのホイアンの居住域がどこであったのかについては、今後さらに調査を積み重ねることが必要になった。

建築についていえば、最大の収穫は、ホイアンの伝統的建物がベトナム中部の民家建築に位置づけられること、さらにいえば、ベトナム中部には北部とはやや異なる民家の様式が分布することが明らかになったことだろうか。今思えば当たり前のことのようにある。しかし調査へ入る前には、「華人街なのでベトナムで中国の民家を調べることになるのではないか」という予想をたてる人がいたり、はじめのころ現地で「これは日本型的小屋組です」などと説明を受けて面食らったり、右往左往していたことを思えばかなりの進歩である。もちろんベトナムの建築や考古学の専門家たちは、地域ごとにどのような特色の民家があるかはある程度把握しており、私たちの知見も彼らに負っている。ただしそれらが系統的に調査されたり、体系的にまとめられたり、ということはまだ十分に行われていない。そこで、1997年から、ホイアン調査のひとつの展開として、全国レベルでいくつかの代表的地区を選び、民家調査を行うという作業が、ベトナムの研究者を中心に開始された。これには日本から、吉田靖、斉藤英俊、山田幸正の各氏が協力されている。

町並みという観点から、都市計画を専攻する私が注目したのは、ホイアンの町家とわが国のそれとが、基本的な構成という点でとてもよく似ているということである。ホイアンの町家は、細長い敷地の上に、道路側から前家→中庭(橋家)→後家→後庭(釜家)と並ぶが、これはまさにわが国の町家の、母屋→中庭→離れ→後庭という構成とそっくりである。ホイアンの町家と京の町家の断面図を並べてみると規



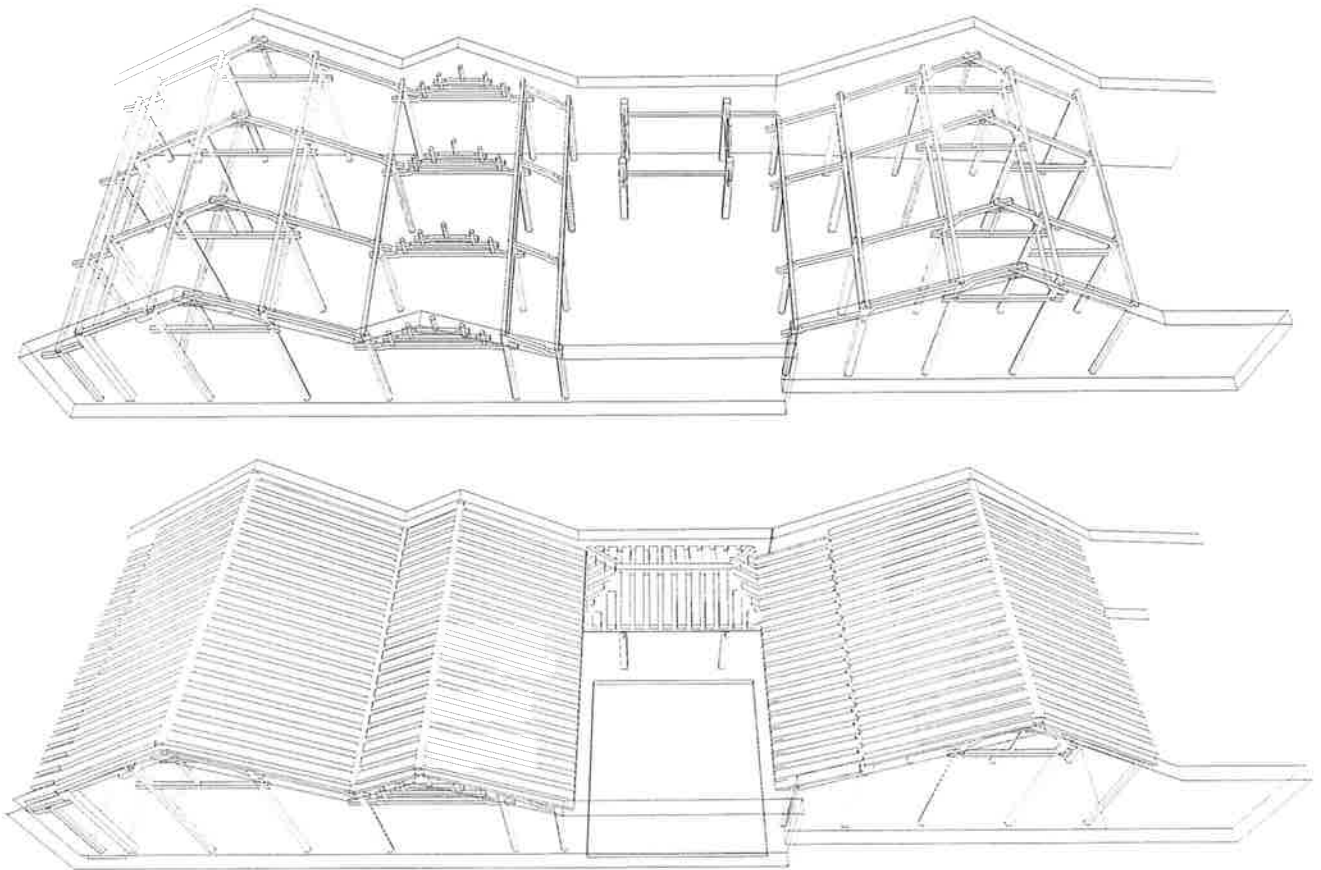


模もよく似ている。町家という形式の持つ普遍性を改めて認識する一方で、多様で個性のある町並みを生み出す地域の固有性の存在に、町並み保存のひとつの原点を確認する思いがした。

さて、伝統的建物は、比較的単純に数種類に類型化できる。古いもので絶対年代のわかる建物はないが、おそらく大部分は、19世紀半ばから今世紀前半にかけての建物であろう。一方、新しい建物では、伝統的建物では倉庫であった2階に居間が設けられたり、暑い気候にもかかわらず個室化が進行していたりといった、わが国の住宅の近代化とよく似た現象が見いだされる。これら調査の結果については、まもなく中間的に総括する報告書ができあがる予定である。より詳しいことはそちらをご覧くださいいただければと思う。

### 町並み保存について

私たちの最初の訪問から5年以上が経過した。この間のドイモイ下のベトナムの変化は、ほぼ半年ごとに訪れるわれわれもベトナムの土を踏むたびに目を見はらされる。ホイアンについて言えば、急速に観光客が増えた。1990年代のはじめは5000人程度であった外国人観光客が、最近では10万人を超えるようになった。これに伴って、町が刻々と変わっていく。最初は、レストランが雨後の竹の子のごとく出現、続いて工芸品を並べたショップや絵画のギャラリーがワーツと増えた。さらに民間のミニホテルの開設が相次いだ。一昨年あたりから増えてきたのは、服や生地を扱うクロス・ショップである。最近



伝統的な建物の構成  
モデルはチャンフー 48番



の最先端は、店頭で彫りや織りを見せる実演販売である。業種だけでなく、これらの店が集まるホットスポットも少しずつ移動する。このことを管理事務所のニャンさんに話すと、「エブリデイ・チェインジ」と言う。まさに町は生きているということが実感される。

このように書くと、文化財の俗化に厳しい見方をする人々は眉をひそめるかもしれない。確かにこれらの変化はわが国の町並み保存で経験した「安易な観光化」そのものである。しかし、町の人々がいろんな工夫をしながらがんばっている様子は、見ていて決して悪いものではない。ホイアンには、昔からの木工と焼物の村があり、それらの産品も店に並ぶ。どの店・どの町にいても地名だけ貼り替えた「レールもん」が並んでしまうわが国とは状況がだいぶ違う。町並みを保存するためには資金が必要である。そもそも町並みを保存する主体が住民であるならば、彼らの経済がたちゆくことこそ第一条件である。問題は、そのエネルギーがうまく町並み保存に結びつくかどうかだ。

実際、観光客の増大は、修復のための費用を生み出しつつある。ホイアンの若い指導者・スー市長は、主要な施設・建物に共通の入場チケットを発売し、その売り上げを町並みの修復にあてるシステムを組み立てた。住民の間にも自分の資金で建物を直す人が出始めた。課題は、これら資金による修復がいわゆる「オーセンティシティ」をどこまで達成することができるか、である。このことは、一昨年9月、中間的な総括のためにホイアンに専門家が集まって開催されたシンポジウムで議論になった。当時、チケット売り上げと国からの補助金を使って、寺院を含む数棟の建物が一斉に修理されていたのだが、どうも少しでも痛んだ部材はあっさりとして捨てて新しいのと取り替えてしまっているらしい。これでは建物が一新してしまうのではないか、というのが参加者から出た意見であった。これまで日本側が主体的にやった修理では、古い部材をできる限り活用するやり方を実践してきたのに、その哲学が十分に伝わっていないらしい。

われわれの協力は「町並み保全のシステム」を構築することを第一の目的にしてきた。しかし残念ながら、その目的の達成は道なればといたところである。私たちとしては、現地の建築専門家と共に調査や修復をし、技術のみならず、文化財や町並み保存の思想、制度、行政システムについてお互いに意見を交換していきたい。しかし、建築の大学がふたつしかないベトナムでは、このような体制を築くことが大変難しい。大学を出た建築家は、大都市で新しい建築を設計することで忙しいのである（とはいえ、研究者たちの伝統的な建物への関心は並々ならぬものがある）。行政の権限の所在も、制度上はともかく実態上は少し混乱している。要するに、日本側を含め資金を出すところが主導権を持つてしまうのである。そのために、われわれが国、省、市などの調整に相当の神経を使うことになる。もっとも日本の町並み保存地区の現状を思えば、あまり大きなことは言えない。せめてわれわれの失敗を他山の石としてほしいと思うのである。

なにしろ、ホイアンの町並みは、わが国でいえば今井町のような存在である。そして目指すのは世界遺産登録である。登録には管理体制の確立が要件となる。地元でもこの問題は真剣に考えられている。行政システムの整備も急ピッチである。問題点は、やがて改善されていくだろう。

ホイアン・ソサエティは個人会員も受け付けています。日本の会員向けには年に1回「ホイアン新聞」が発行されます。問い合わせは、昭和女子大学・国際文化研究所、マーク・チャン氏 (03-3411-5166) まで。

ICOMOS/東文研 海外文化遺産講演会

## 「アクロポリスの歴史とその修復」

マノリス・コレース(ギリシャ文化省アクロポリス文化財保護委員会主任建築家)

「パルテノンの修復家」マノリス・コレース氏が、東京国立文化財研究所の招きで3月9日~19日の日程で来日され、この機会にヨーロッパの、いや世界の文化遺産の象徴とも言うべきパルテノン神殿、そしてアクロポリスの保存修復の歩みをご紹介頂こうと、3月14日午後2時より、神田の学士会館において、上記のタイトルで講演会を開催した。今回はイコモスの会員以外にも公開され、美術史の福部信敏教授(跡見学園女子大学)、西洋古典考古学の関隆志教授(大阪市立大学)をはじめ、関係大学の助手・院生の諸君、はては EC 欧州連合代表の方などの御出席があり、広い関心をうかがわせた。

筆者がコレース氏の名前を初めて知ったのは、一昨年10月に大阪市立大学の主催で行なわれた国際学術シンポジウム「都市と文化財」においてである。その際の講演もさることながら、同時に大阪市立博物館で開催の「世界文化遺産アクロポリス展」に出陳された、氏による50枚近い大判の修復関係の図面に圧倒されてしまった。詳細な平面図・立面図に始まり、アクトノメトリックによる構造解析図、さらに災害を受けたパルテノンの想像図に至るまで、単なる技術者の職能を超えた、氏の建築への深い愛情と芸術性があふれ、またそれらのすべてが、建築家が修復に関わるとはどういうことか、ということを実に示しているように思えたのである。この展覧会自体には多数の入場者があったということだが、それにしても大阪だけでしか開催されないのがいかにも残念であったし、もしこれが保存修復関係の各大学を巡回するようなことができればどんなに良いだろう、と痛切に感じられた。(この夢はいまだに抱いている。)

今回の来日をお世話して、コレース氏の思った以上の暖かい人柄に触れ、また東京での講演会も実現することができて、夢の一端が叶ったようである。ギリシャを訪問して氏と親交を得た日本の研究者も、会員の日高健一郎氏や伊藤重剛氏(熊本大学)など、何人もいらっしゃると聞く。この来日が氏の日本との関係をより深めることが出来たことを喜ぶとともに、僭越ながら日本の西欧古典古代建築研究のさらなる発展をも願いつつ、筆を置くこととしたい。

(松本修自 東京国立文化財研究所  
国際文化財保存修復協力センター 保存計画研究指導室長)

\*\*\*\*\*

[参考文献] “Acropolis Restoration” Richard Economakis(ed.)  
Academy Editions, London. 1994

Manolis Korres  
**Acropolis. History and restoration.**  
(Summary)

The Acropolis hill consists of a lower zone of impervious schist-sand-marly formations with gentle slopes and an upper zone, the Acropolis rock proper, of massive, thick platy, limestone with conspicuously precipitous cliffs, and many fissures that make it permeable. Rain water is continuously seeping down through the fissures and being deposited in the aquifer formed along the contact between the rock and the underlying impervious formations with the result that there exist some small springs along the foot of the rock.

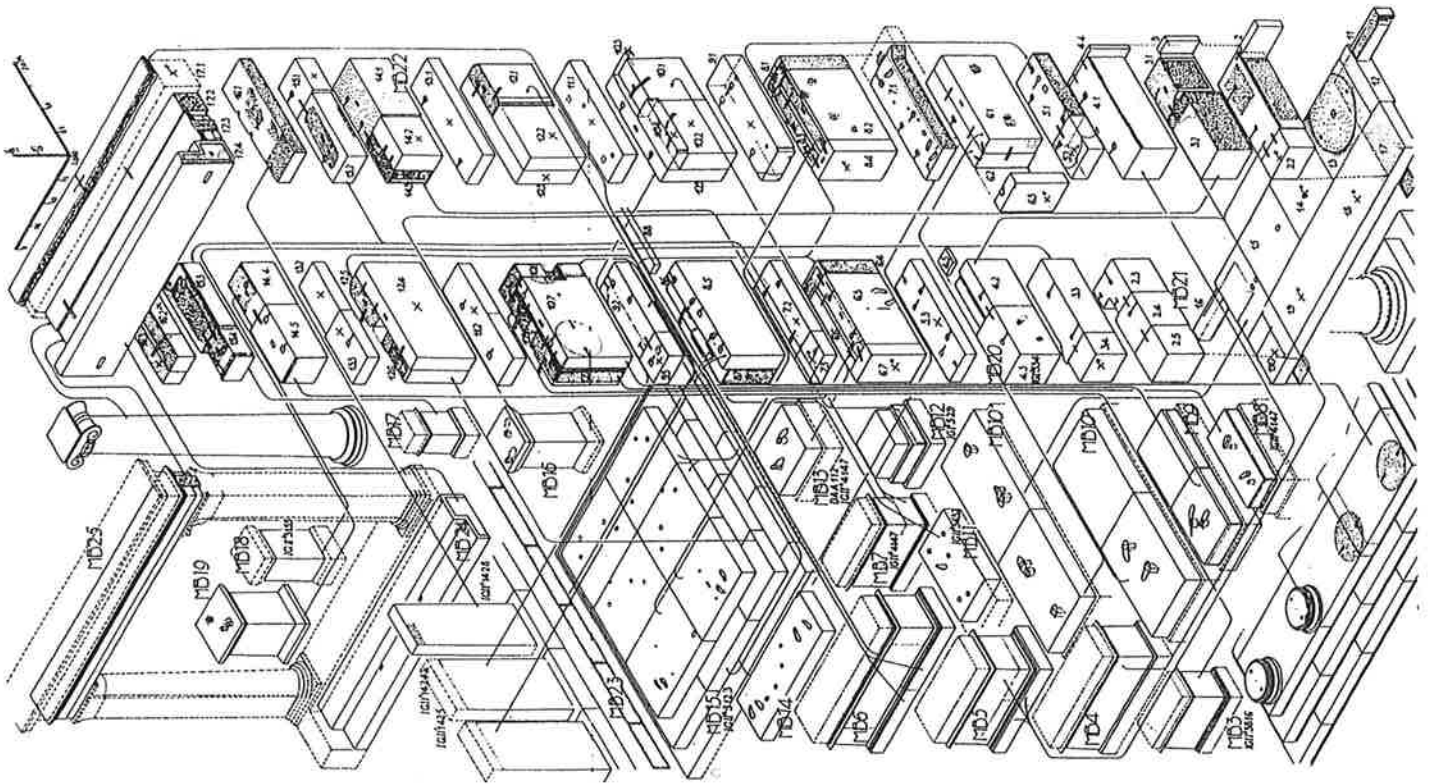
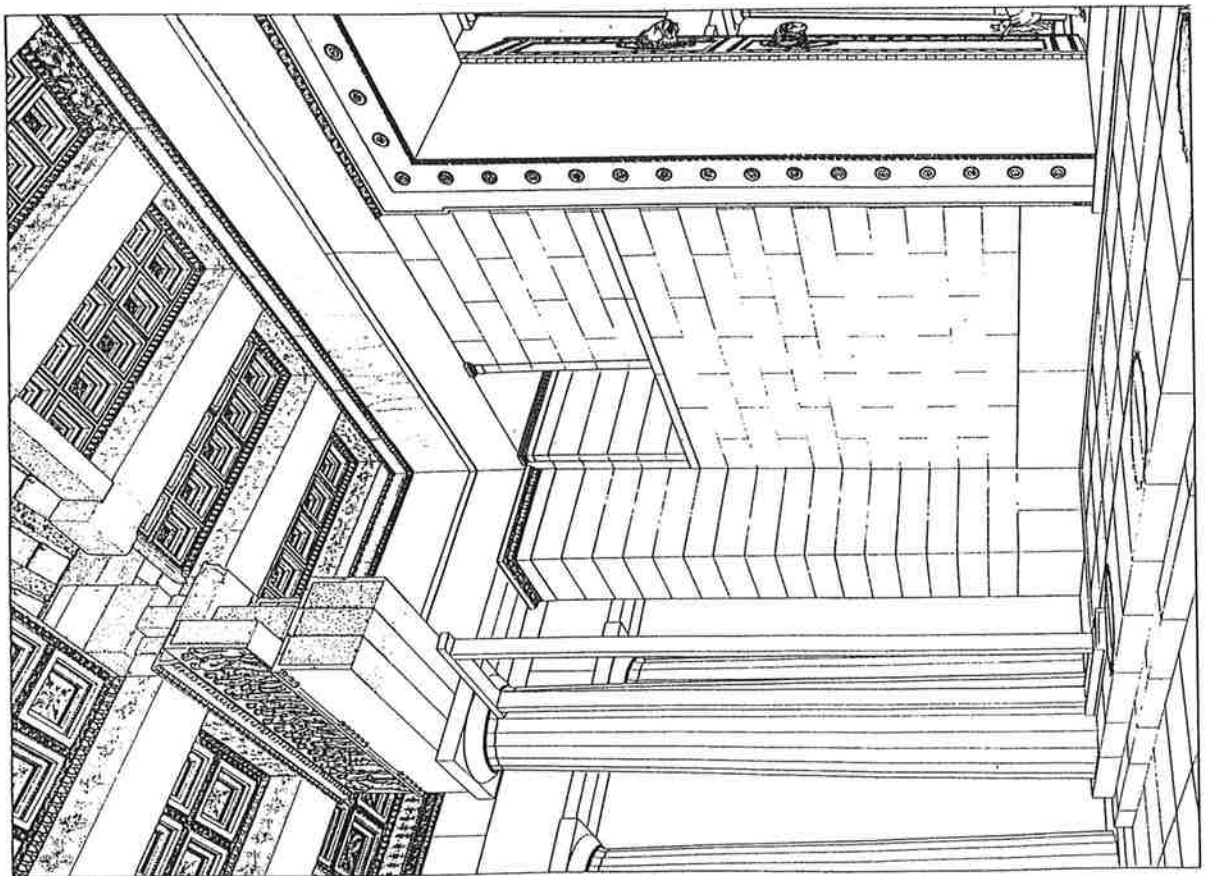
This geological property (or particularity) greatly counts for the fact that in all times settlers and occupants of any kind always preferred the Acropolis to any other hill of Athens. The Acropolis springs remained the most important places for five millennia with a direct influence in the urbanistic evolution of the whole area. The most important streets (Peripatos, Panathenaic way) already existed much before Athens became a city. They used once to be roads in a rural landscape and still earlier, more than five thousands years ago they were already existing as paths that gave access to the springs. When the first aqueducts were built in the 6th century B.C., the original purpose of these streets was no longer as important, but nevertheless their route was never changed, at least not substantially, until the eve of the modern times.

In the Mycenaean period (ca 1600-1200 B.C.) the Athenian population was well advanced. In the 15th century B.C. the Acropolis top was extensively inhabited. In the middle, between the North and South way a mansion or strong-house emerged. In the next century the mansion and many houses around it were demolished and a palace took their place.

Mycenaean palaces usually consisted of a series of rectangular rooms grouped together around courtyards. Corridors secured with subsequent gates connected the particular sections of the palace. The foundations and retaining walls were made of large irregular stones. The lower part of the walls and the bases of the columns were made of hewn stones. The largest part of the walls, was a system of wooden frames and small stones or sun dried bricks in between. Columns and roofs were completely wooden. Plaster coatings protected the walls and metal sheetings covered the most important and precious parts of columns, doors or entablatures. The whole was complemented with wall paintings and other multicoloured decorations.

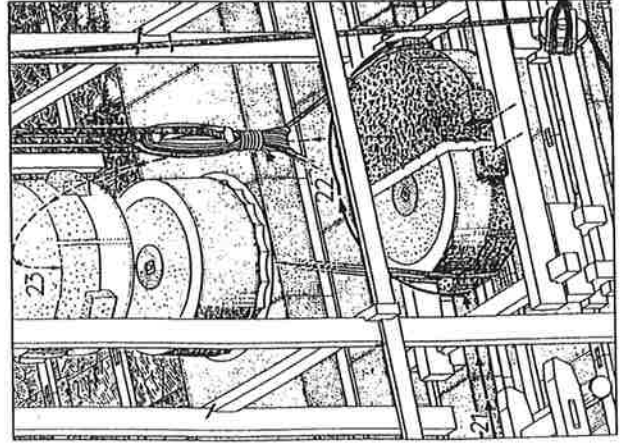
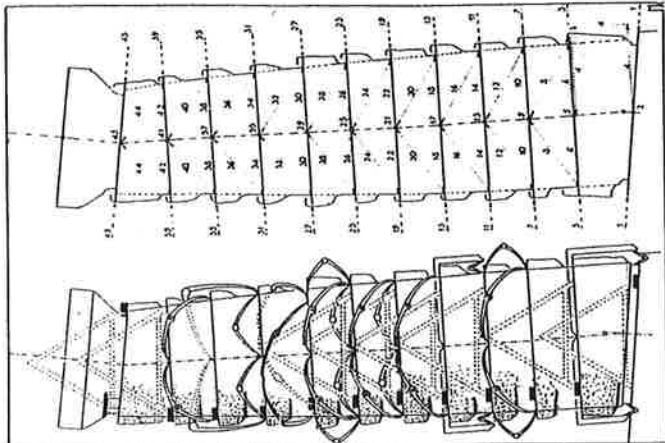
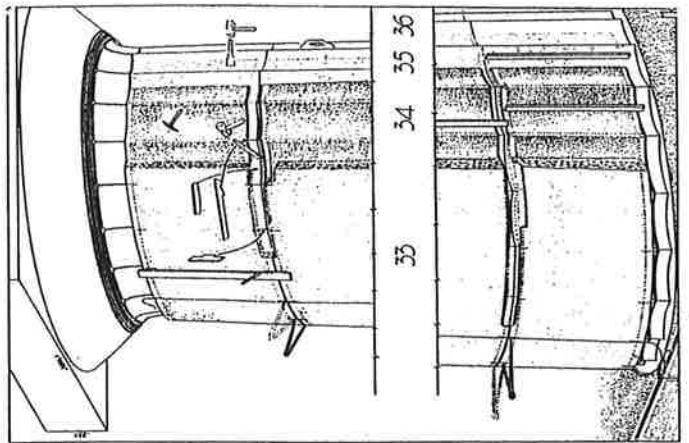
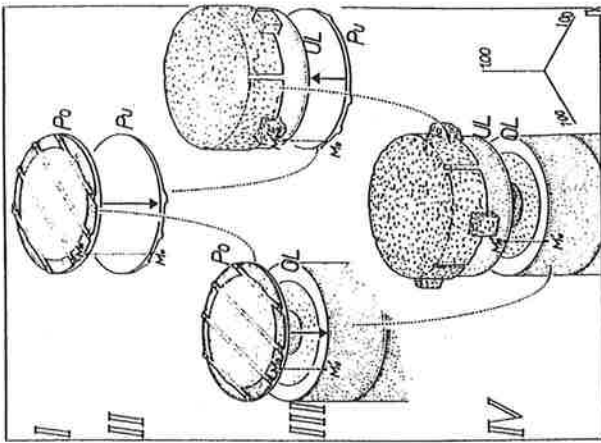
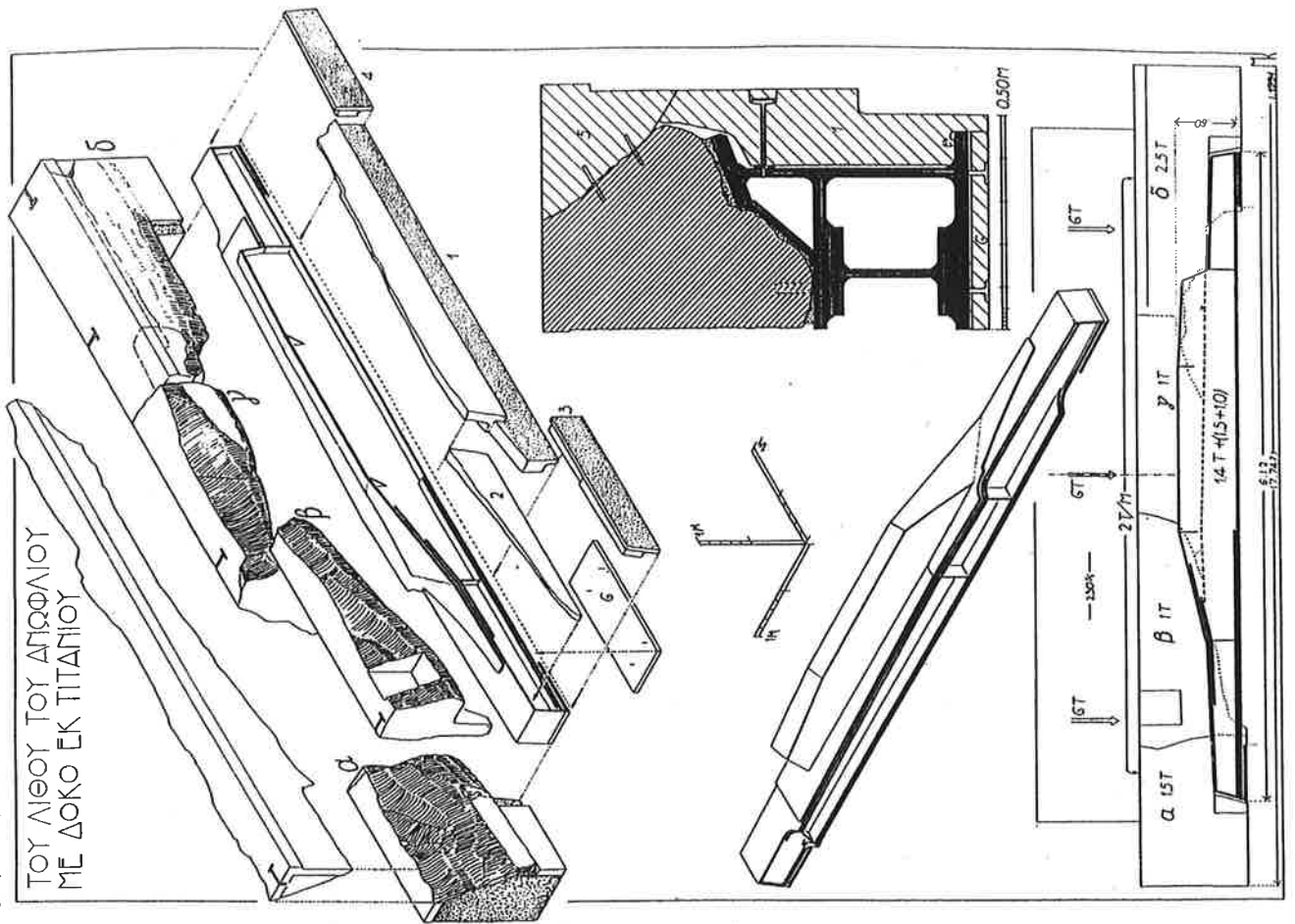
At the end of the 13th century B.C. the Cyclopean wall was built along the edge of the rock in an impressive megalithic technique. In the 11th century the palace was destroyed and abandoned. After the destruction of the palaces life on the Acropolis continued but in a very modest way. Soon a new start was made and a new cultural period, the so called geometric was emerging out of the Mycenaean ruins. In contrast to the Mycenaean architecture and for the most of the time, the architecture of the geometric

図版 1  
 パルテノン前室の復原透視図 (左)  
 転用石材によるローマ時代の扉口の復原 (右)



図版 2

パルテノン円柱の構築の原理と製作法説明図 (左)  
まぐさ石補強のためのチタン梁導入の提案 (右)



period was too elementary. Nevertheless other manifestations of that culture, as for instance metallurgy of iron or pottery were really impressive.

During the geometric period major social, political and religious changes took place. the kingship was abolished and replaced by a new system of political rulers named Archonts, who were being elected from the class of the great landowners. Their service was originally lifelong, but later, in 753 B.C. it was limited to 10 years. In the meantime religion was being developed too. Following these historical phenomena Acropolis was no longer the stronghold or seat of secular or political rulers. Along some natural features of the rock and among the ruins of the palace or of some peripheral houses, worshippers started to distinguish some parts as places of the divine. The highest part of the plateau was reserved for Zeus, the god of heaven and weather. Close to it the altar of his daughter Athena was placed, who was now the city's patron. In the course of time the sacred precincts become larger.

In about 570 B.C. the first monumental temple was built for Athena Parthenos, that is for Athena's martial manifestation, on the place now occupied by the Parthenon. It was a 46m long doric temple with six columns on each front and 14 columns on each flank made of hard Piraeus stone.

Two generations later the much earlier temple of Athena Polias, that is of Athena's peaceful manifestation as the city's protector, was replaced by a new doric temple. Its foundation are still visible to the south of the Erechtheum.

In about the same time the other sanctuaries of the Acropolis were renewed too. Remnants of as many as 11 different such buildings, and of hundreds of statues, tripodes and other objects, now in the Acropolis museum, bear witness of the unprecedented architectural and artistic activity of Athens in the 6th century B.C.

In about the end of that century or the beginning of the next the newly established democracy set out a very ambitious plan completely to replace the existing limestone Parthenon with a new one, however, only the huge podium of it was finished before 490 B.C., the year of the Persian invasion against Greece.

Just after 490 B.C plans were resumed to continue rebuilding the Parthenon but after a new design made for marble and not for limestone. The new building programme included a propylon unique in its magnitude that was placed at the location of the ancient Mycenaean gate. The construction of the new marble Parthenon had progressed up to the height of the second or third column drum course when it was halted in 485 B.C. In 480 B.C., the Persians burned down the Acropolis.

After the war the Athenians did not immediately rebuild the temples, but apart of some modest repairs they had decided to postpone the rebuilding of the temples for about 30 years. New walls were, however, built along the north side of the Acropolis immediately after the war and along the south side 15 years later. These, still existing walls are insofar remarkable as they creatively incorporate blocks, column drums, capitals, architraves, etc selected from the buildings destroyed in the war.

About the middle of the 5th century, while the Athenian power was in its highest point, a very extensive plan was set up completely and in the most perfect way to rebuild all the buildings destroyed by the

invaders. On the Acropolis the result of this unprecedented combination of wealth and unrivalled ideas was the Parthenon, whose creation was completed in the unbelievable time of 8 years, next in splendour the Erechtheion, the Propylaea, and a great number of smaller buildings and votive offerings, which in their majority were veritable masterpieces of art and architecture.

During the first century B.C. the interior of the Erechtheum was destroyed by a fire. During the exceptionally precious repair that followed under Augustus, the temple underwent a few essential changes. About the same time a nine columned circular temple of Roma and Augustus was constructed some 20 metres from the Parthenon's east front. In 267, the Heruli originating in the north Europe, overran Greece setting almost all the public buildings in fire. The interior of the Parthenon the Erechtheion and presumably of the other buildings, excluding the Propylaea was completely destroyed. Subsequently, the Athenians deliberately dismantled a great number of the buildings that have been destroyed in order to use their stone in the construction of a new circuit wall. In this way all the buildings of the Acropolis except the Parthenon, the Erechtheion, the Propylaea and the Athena Nike temple disappeared.

In the next century the Parthenon, was repaired with marble blocks that were removed from the bases of various classical monuments and material from the dismantling of a 200 m long stoa. In about the 6th century the Parthenon was converted into a Christian church. In the 12th century the church, already an Episcopal see, was greatly renewed. In 1687 while the Turks were using the Parthenon as a munition storeroom ca 500 barrels gunpowder were ignited by a Venetian bomb and the central part of the building exploded.

In 1800-2 Lord Elgin took the largest part of the Parthenon sculptures as well as many sculptures and important architectural members from the Erechtheion and the other monuments.

Steps taken towards the Parthenon's restoration began in 1834 under the supervision Leo von Klenze. Two years later (1836) the temple of Athena Nike was reassembled under the supervision of L. Ross, C. Hansen and E. Schaubert

In 1842-1844 a part of the walls and two of the fallen columns of the Parthenon were restored. Much later, under the supervision of Nikolaos Balanos, restoration work took place from 1898 to 1902 and again from 1922 to 1933, and left the Parthenon in the form with which we are now familiar.

Problems relating to the Preservation of the Acropolis Monuments began to be noticeable as early as the mid-40's. Since then although the efforts of the Acropolis Ephorate to conserve the monuments had been multiplied the progress of the deterioration had been increased.

By 1975, it had become evident that a large-scale intervention would be necessary and the Committee for the Conservation of the Acropolis Monuments ( C.C.A.M. ), was established, with the task to plan, organise and supervise the work required for the conservation of the Monuments. C.C.A.M. works with the support of the services of the Ministry of Culture and in direct cooperation of the 1st' Ephorate of Antiquities ( the "Acropolis Ephorate" ). Since its establishment C.C.A.M. set up a personnel composed of



specialists ( archaeologists, architects, civil engineers, chemists and conservators ), whose task is to study, plan, supervise and carry out the different projects or Programs (for example the division of the Parthenon-Project into 12 Programs).

An additional personnel has been also employed to serve the secretariat the archive and the book-keeper's office. ( only later incorporated in the personnel of the ministry and especially of the 1st Ephorate ). From 1975 to 1982 the whole enterprise was financed exclusively by the Hellenic State but since 1983 the E.E.C. contributes considerably to the payments ( ca 20% of the annual costs )

In 1977 the study for the restoration of the Erechtheum was published and in 1983 and 1989 respectively the 1st and 2nd band of the Study for Restoration of the Parthenon. These studies were submitted to international criticism in "ad hoc" organised International Meetings for the Restoration of the Acropolis Monuments ( Dec1977, Sept 1983, Apr.1989, May 1994)

In 1976 original sculptures were transferred from the west Pediment of the Parthenon into the Museum and the Panathenaic street inside the Acropolis was restored with a new covering protecting its original surface against abrasion and enabling visitors to go up easier and secure.

From 1977 to 1987 a large part of the Erechtheion has been dismantled, stone by stone and reerected after a systematic repair of all structural elements and conservation of a large part of ancient surfaces. Hundreds of iron structural elements of varying sizes were replaced by equivalents made of titanium, the NE corner and a part of the north side had been complemented with newly identified original ashlar or casts and the Caryatids were replaced by copies. In 1987 some of the original parts of the frieze of the Athena Nike temple had been taken down and transferred into the museum.

In order to house the sculptures removed from the monuments one room of the old Acropolis Museum has been modified and in three others the disposition of the exhibits had been condensed and rearranged.

From 1980 onwards the Parthenon has been systematically studied and investigated. From 1983 to 1985 the installation of workshops, large working surfaces of thick reinforced concrete, a short railroad, cranes, scaffoldings and a series of different mechanical devices and instruments has been completed. In the same time more than 1000 tons of large stones and fragments belonging to the great temple had been collected from everywhere on the Acropolis or from outside of it and assembled closely to the south of the Parthenon, after they had been numbered, catalogued and secured against serious cracking caused mainly by existing oxidised dowels.

From 1986 to 1991 the east Pediment and a large part of the entablature has been dismantled down to the level of the capitals or deeper. 150 original architectural members, weighing ca 250 tons have been taken down in the workshops, repaired, restored and reset again exactly in their places.

The original metopes and the pedimental sculptures (4 originals and 3 copies) have been replaced with casts. The SE column having been violently shifted by earthquakes was reset with a special mechanical method without dismantling.

Since 1993 :



-The earlier restored (1835) parts of the north- and south-wall are dismantled to be properly restored.

-The west end of the Cella for restoration and conservation and removal of the in situ part of the Panathenaic Frieze in particular.

- The 1st drum of the 5th column of the south side has been repaired and completed. All corresponding parts of the entablature had been dismantled and the rest of the column have been temporarily dislocated by 2.5 meters, without further dismantlement thanks to a sophisticated mechanical carrier operating friction-based grasping, uplifting, rotation and sliding of weights up to 100 tons.

In the Propylaea a lot of work has been done. A full documentation of the state of the pavements and of the monumental marble coffered ceilings as well as a general documentation of the whole building is completed. More than a hundred of stones belonging to the entablatures and the cornices of both the north and the south wing have been identified as well as four hundreds of fragments of the marble ceilings.

In 1988 the big late-Roman cistern was cleared from a late 1880s filling containing ca 400 tons of earth and ancient stones, many of which were resorted, investigated and catalogued.

From 1988 to 1991 the installation of a heavy working surface resting on a strong multicolumnar iron substructure, a portal crane, two workshops and many scaffoldings equipped with pulleys was also completed. Care has been taken for the pre-existing poros- foundations. The architrave above 4th and 5th column of the east front with a corresponding part of the pediment have been taken down in the workshops, repaired, restored and reset exactly in their original places.

From 1990 to March 1992 the restored (1908, original marble coffers reinforced with modern - 1908-iron beams, original marble beams reinforced with a modern iron beams) part of the ceiling of the Propylaea proper has been dismantled in order to be repaired and restored. At the same time the orthostates of the northern part of the building (The Pinakothek) have underwent the treatment of conservation. The crumbling surface of the interior Ionic columns has been conserved. Since 1976 scientific inspections, measure-

ments and studies concerning the Acropolis rock have been carried out, in order to serve its conservation.

From 1980 onwards a scientific and technical team has been appointed to work for the cleaning, the conservation and the consolidation of the rock surfaces outside of the Akropolis-walls. For ten years wooden multistoried scaffoldings following the complicated form of the rock were subsequently erected and dismantled at all of its sides. Thousands of cubic meters of plants and humus, accumulated there during a long period of time, were removed and thousand meters of fissures and gaps in the rock were patiently cleared and washed-off, sometimes in depths reaching many meters. Consequently the gaps were infilled with special inorganic mortars and the unstable parts of the hangs were anchored into the solid core with anchoring stain-less metal rods inserted and fastened with a mixture of mortars into drillholes. All vulnerable parts in a circumference of 800 m of the Acropolis-rock were already secured.

The following have still to be done:

Parthenon: reassembling of the west end of the Cella and positioning of casts of panathenaic Frieze in particular. reassembling of the restored part of the north wall.

-Dismantling of the restored part of the north colonnade ( 8 columns and corresponding entablature )

-Dismantling of the restored part of the south colonnade ( 2 columns and corresponding entablature.

-Repair of the all the stones dismantled.

-Repositioning and further restoration of all the parts dismantled

-restoration of the pronaos of the temple using mainly the identified ancient stones and titanium for the joins. Propylaea: Dismantling of the upper part of the Pinakothek, demolition and replacement of the modern concrete construction in its interior, consolidation of its foundation, especially to the west and north.

-Anastylosis of the original form of the upper part of the Pinakothek and possibly reconstruction of its roof.

Dismantling of the upper part of the east porch, repair of its elements and new restoration incorporating newly identified material.

-The same at the S-wing. Temple of Athena Nike: Complete dismantling and conservation of all stones, demolition of the modern(1938) concrete substructure, replacement of its iron post and beams, reconstruction of it and new revised restoration of the temple proper incorporating new identified architectural members and using titanium instead of iron or bronze.

The Erechtheion: Covering of the ceiling of the N.-porch with a new roof. Restoration of the newly identified part of the Pandroseum, protective infilling of the interior. The Acropolis-Walls: Study, consolidation of different parts, partially dismantling of some buttresses ( ca 1750 ) and possibly restoration of them with replaced material. The Surface inside the walls including the visible part of the rock: Further documentation; Further study of methods for its protection; restoration of the original levels using waterproof earth in order to protect the rock against abrasion and sipping and to ensure quick retirement of the rainwater by only surface flow, Counting with the size of the free surfaces and the complexity of the archaeological and technical conditions this project should be considered as so expensive as important.

The Complementary monuments (Votive monuments, Commemorative monuments etc.): This project aiming to a reassembling of the stones of as many as possible smaller monuments and to the restoration of many of them to their original places is in spite of prevailing opinion a very promising one but it has to be carried out rather later.

# 事務局日誌

(1998/1/1-3/27)

1998年

- 1/12 ICOMOS会長 Roland SILVA 氏 (SRI LANKA) より「GREETING FOR 1998」受領
- 1/12 ユネスコ本部より UNESCO Publishing No.3/4 1997 (出版物カタログ) 受領
- 1/14 US/ICOMOS より [International Symposium - Questions of Interpretation: Historic Urban Settlements & Cultural Tourism] の案内 (1998/3/28-29 於 Washington DC) 受領
- 1/16 日本イコモス国内委員会の1998年名簿 (ローマ字表記) をパリ本部に送付
- 1/19 パリ本部より ICOMOS/NEWS Vol.7 No.3 December 1997 受領
- 1/19 ICOMOS/Canada より BULLETIN Vo.16 No.2 1997 受領
- 1/21 BULGARIA/ICOMOS より新年の挨拶状および委員長宛の信書受領
- 1/21 US/ICOMOS より NEWSLETTER No.6 November-December 1997 受領
- 1/23 パリ本部の Henry CLEER 氏 (World Heritage Coordinator) より世界遺産審査の件で委員長宛の F A X 受領
- 1/24 1998年次第1回理事会開催 (10:30-13:30 ・於学士会館本館)
- 1/26 パリ本部より、1997年11月にモロッコの首都ラバートで開催された Advisory Committee (石井 昭委員長出席) の議事録他受領
- 1/28 アンドリュース・クリエイティヴより「世界遺産を旅する」No.5 (ドイツ・オランダ・ルクセンブルク・北欧編) 受領
- 2/3 ユネスコより、世界遺産条約加盟国第11回総会 (1997/10/27-28) の議事録受領
- 2/5 石井委員長が「古都奈良の文化財」の視察と審査協力のため奈良を訪問
- 2/9 パリ本部より、奈良の世界遺産候補を視察し審査擦る目的で、2/9-13に中国イコモスの GUO Zhan 氏が来日される、との F A X 受領 (石井委員長宛)
- 2/12 世界遺産審査の件で来日された GUO Zhan 氏と石井委員長他が東京で会談
- 2/13 [JAPAN ICOMOS INFORMATION] 3-12 (1/31発行) を会員各位に発送
- 2/13 アンドリュース・クリエイティヴより「世界遺産を旅する」No.4 (オーストリア・東欧編) 受領
- 2/13 ICOMOS/Underwater Cultural Heritage の HENDERSON 氏より委員選挙についての石井委員長宛の F A X 受領
- 2/13 ICOMOS/Cultural Tourism の名簿および Charter の draft (No.5) 受領
- 2/16 パリ本部より [Comprehensive Budget for ICOMOS] のアンケート用紙受領
- 2/18 マノレス・コレース氏講演会 (3/14 2:00-4:00 ・学士会館本館、東京国立文化財研究所と共催) のご案内を会員各位に発送
- 2/20 ICOMOS-SPAIN より、専門専門分科委員会 [Cultural Corridors] の設立趣意書受領
- 2/23 パリ本部より、1998年の会員カードおよび会員名簿 (本部の C P 入力分) 受領
- 2/23 [INFORMATION] 第4期第1号発行の打ち合わせ会開催 (石井 昭委員長・藤木良明、山田幸正両広報担当理事および事務局の我妻
- 2/27 会員カードおよび会費納入のお願いを会員各位に送付
- 3/2 社団法人日本ユネスコ協会連盟より、「ユネスコ世界遺産年報 1997/1998」受領
- 3/13 パリ本部より ICOMOS NEWS Vol.8, No.1 March 1998 受領
- 3/14 マノリス・コレース氏講演会開催 (2:00-5:00 於学士会館本館)
- 3/14 アンドリュース・クリエイティヴの矢島社長及び担当者と、石井委員長・我妻で <世界遺産を旅する> の記事監修について協議 (1:00-2:00 於学士会館)
- 3/20 ICOMOS の General Secretary J. Luxen 氏 (ベルギー) より、[Youth & Heritage International] についての文書及びアンケート用紙受領
- 3/23 1998年第2回拡大理事会および第1回憲章等研究会の開催通知を関係各位に発送

## 木造建築物保存原則・草案

にご意見をお寄せください

ICOMOS 傘下の INTERNATIONAL WOOD COMMITTEE (木の委員会) では、PRINCIPLES FOR THE PRESERVATION OF HISTORIC TIMBER STRUCTURES (歴史的価値をもつ木造建築物の保存のための諸原則) と題するドクトリナル・テキストの最終草案を、ICOMOS本部事務局(パリ) 経由で各国の国内委員会に送付し、現在、その内容についてコメントを提出するよう求めています。本誌の2～6ページをご覧ください。草案作成に長らく関与してこられた伊藤延男・村上裕道両氏による懇切な解説とともに全文が収載してあります。会員の皆様には、これをご精読のうえ、賛否にわたるご意見、とりわけ修正提案にかかわるご意見がありましたら、下記要領によりお送りくださるようお願いいたします。

形式： 自由 — 英文または和文

送付先： 日本イコモス国内委員会事務局 — FAXまたは郵送

期限： 4月17日(金曜日)

ICOMOS本部への回答期限は4月15日と指示されていますが、日本イコモスでは、4月18日(土曜日)に拡大理事会を開催しますので、その審議に付したのち、正式の意見書を作成し提出することとします。木造建築物の保存といえは我々にとって最も関係深い主題です。どうか積極的にご意見をお寄せください。

(石井 昭)

## ブルガリア ICOMOS との研究交流計画について

昨年の9月から本年3月14日まで、ブルガリアからイコン修復の専門家アングル・トクマクチエフさんをお芸大にお迎えしておりました。これを機会にして、日本 ICOMOS とブルガリア ICOMOS との交流を更に深めたいと思ひ、ブルガリア訪問の旅を目下計画中です。時期は9月下旬から10月上旬にしたいと思ひています。

(前野まさる)

## お詫びと訂正

[ INFORMATION ] 3-11 ('97. 10/31 発行) の目次、及び、同 3-12 ('98. 1/31 発行) の3ページ中段と6ページ上段の

岸本雅敏氏のお名前を岸本雅俊氏と誤植印刷

いたしました。岸本氏には大変ご迷惑をおかけいたしましたことをお詫びし、ここに訂正させていただきます。

(事務局)

---

日本イコモス国内委員会・理事会 JAPAN-ICOMOS EXECUTIVE BOARD

President	委員長	石井 昭	Akira ISHII
Trustees	理事	稲葉 信子 上野 邦一 岡田 保良 近藤 公夫 田中 琢 田原 幸夫 日高健一郎 藤木 良明 藤本 強 前野まさる 宮本長二郎 宗田 好史 安原 啓示 山田 幸正 渡辺 保弘	Nobuko INABA Kunikazu UENO Yasuyoshi OKADA Kimio KONDOH Migaku TANAKA Yukio TAHARA Kenichiro HIDAKA Yoshiaki FUJIKI Tsuyoshi FUJIMOTO Masaru MAENO Nagajiro MIYAMOTO Yoshifumi MUNETA Keiji YASUHARA Yukimasa YAMADA Yasuhiro WATANABE
Auditors	監事	石澤 良昭 木原 啓吉	Yoshiaki ISHIZAWA Keikichi KIHARA
Advisors	顧問	伊藤 延男 稲垣 栄三 坪井 清足	Nobuo ITO Eizo INAGAKI Kiyotari TSUBOI

小委員会 WORKING GROUPS

Chiefs	主査	益田 兼房 羽生 修二	Kanefusa MASUDA Shuji HANYU
--------	----	----------------	--------------------------------

---

国際諸委員会参加者 REPRESENTATIVES TO INTERNATIONAL COMMITTEES

Executive Committee	西村 幸夫	Yukio NISHIMURA
Advisory Committee	石井 昭	Akira ISHII
Specialized Committee on :		
Archaeological Management	牛川 喜幸 本中 眞	Yoshiyuki USHIKAWA Makoto MOTONAKA
Structures	日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
Historic Towns and Villages	上野 邦一	Kunikazu UENO
Underwater Cultural Heritage	荒木 伸介	Shinsuke ARAKI
Training	稲葉 信子	Nobuko INABA
Historic Gardens and Sites	近藤 公夫	Kimio KONDOH
Vernacular Architecture	大河 直躬	Naomi OKAWA
Wood	伊藤 延男	Nobuo ITO
	村上 裕道	Yasumichi MURAKAMI
	松本 修自	Shuji MATSUMOTO
	益田 兼房	Kanefusa MASUDA
	渡辺 保弘	Yasuhiro WATANABE
Earthen Structures	岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
Cultural Tourism	石井 昭	Akira ISHII
Legal Issues	河野 俊行	Toshiyuki KONO

---



**JAPAN ICOMOS INFORMATION**

Vol. 4, No. 1 31 March 1998

日本イコモス国内委員会 委員長 石井 昭  
事務局 担当理事 渡辺保弘 職員 我妻綾子  
〒169-0072 東京都新宿区大久保 3-9-5-113 (株)文化財工学研究所 気付

**JAPAN-ICOMOS OFFICE**

c/o Bunkazai Kougaku Kenkyusho  
3-9-5-113 Okubo, Shinjuku-ku, Tokyo 169-0072, Japan  
Tel. 03-3200-9355 Fax. 03-3200-9423